

早稲田大学大学院教育学研究科
博士学位審査論文概要書

中学校の部活動の教育的効果に関する研究

—歴史的考察と調査研究—

2010年

仁木 幸男

1. 研究主題の設定と研究目的

第一に、中学校における部活動は、新制中学校発足とほぼ同時に出発し、爾来 60 数年にわたって実質的に学校教育として扱われてきた。開設される部活動の数が少なく児童の参加が限定的である小学校の部活動や、外部指導者の導入が早くから進んでいて、練習時間の制限の少ない高校の部活動と異なって、中学校の部活動は、大多数の教員が指導者を勤め、学校教育や生徒指導の一環として実施され、かつ学校経営上重要な教育活動として位置づけられてきた。そこで、本研究は中学校の部活動を研究の対象とした。この中学校の部活動は、学校教育の一つの支柱であったにもかかわらず、なぜ学習指導要領ではまったく言及されないか、または間接的な位置づけにとどまってきたのであろうか。

第二に、21 世紀に入って、少子化による中学生の減少や教員の高齢化にともなって、都道府県市町村教育委員会の部活動活性化対策にもかかわらず、中学校の部活動は運営の危機に陥っている。この危機を打開するために、中学校の運動部活動を地域社会体育に移行する総合型地域スポーツクラブもかならずしも計画通りに進行していない。また、文部科学省は平成 19 年度から「運動部活動等活性化推進事業」として一人の児童生徒が複数種目のスポーツを行う「総合運動部」や、スポーツの楽しさを前面に出した「ニュースポーツ・レクリエーション運動部」といった新しい姿の運動部の実践研究に着手している。たとえ運動部活動だけでなく文化部活動を含めた中学校の部活動を中学校教育から社会教育に移行しても、従来期待されていたような教育的効果を発揮できるのであろうか。新しい姿の部活動に改革したとしても、教育的効果をあげるのであろうか。

第三に、今、中学校は低い学習意欲と学力不振、減少しない不登校児童生徒、凶悪化する児童生徒の非行、根絶できないいじめ、崩壊しつつあるしつけ、増加するペアレント・モンスター等の多くの課題を抱えていて苦しんでいる。学校教育から部活動を社会教育に移して学校の負担を軽減するスリム化方策は、はたしてこれらの課題の解決につながるのであろうか。

第四に、中学校の部活動実施上の困難は、生徒数の減少や教員の高齢化だけでなく、部活動指導の大半が勤務時間外に行われていることに起因する。また、部活動の位置づけがあいまいなために、部活動指導は校務分掌として扱うことができないことは、校長の苦悶するところである。なぜ中学校の部活動指導は校務ではないのだろうか。

以上のような疑問の回答を見つけるためには、まず部活動の教育的効果を明らかにしなければならないと考えた。部活動を社会教育化するにせよ、新しい部活動に転換するにせよ、中学校の部活動が果たしてきたと考えられる教育的効果を喪失することなく、その教育的効果を拡大する方向で部活動改革は進められなければならない。しかし、部活動の教育的効果は、時代によって異なっていたことも考えられ、これまでも歴史的な視点から一貫した研究があまり行われてこなかった。また、中学校の部活動の今日的な教育的効果に関しても十分な調査分析は実施されていない。そこで、本研究の研究主題を『中学校の部活動の教育的効果に関する研究—歴史的考察と調査研究—』と設定した。

したがって、本研究の目的は、中学校の部活動に関して歴史的に考察し、また調査を実施してその教育的効果を明らかにして、部活動改革を進めるための重要な視点を見出すことにある。

2. 先行研究と本研究の着眼点

本研究の歴史的考察においては、中学校の部活動の教育的効果を探るために、新制中学校の部活動の原型となった旧制中学校の校友会にさかのぼって考察する。旧学校制度下における校友会は、明治以来学校教育の一翼を担ってきたのにもかかわらず、その研究は少ない。そのなかで、桑原三二は、およそ 40 校の校友会についてその設立の目的や組織を調査して、(1) 画一的、注入的な学校生活の緩和、(2) 異年齢集団の学習効果、(3) 地域のスポーツの興隆、文化の向上、(4) 生徒の生甲斐、学校に来る喜びといった 4 つの教育的効果を明らかにした貴重な先行研究である。しかし、その教育的効果を期待して学校が意図的に部活動を教育の手段として利用したということはなかったのであろうか。

渡辺洋三は、文部省や学校が、校友会の教育的効果を学校現場に積極的に取り込んでいった観点に立って歴史的考察を行っている。学校制度発足以降の文教政策が初等教育の普及や、高等教育の整備に迫られて、中等教育の校友会活動はほとんど学校現場の教員に任されていたこと、明治末期になって文部省が校友会の教育的効果に気づいたことを明らかにしている。ところで、この校友会活動が生徒の自主・自律の精神を涵養し、知的発達を促進し、教員自身の成長を促す側面もあったのではないだろうか。

本研究では、学校現場では広く「文武両道」という言葉が膾炙されていたことから、東京府立第一中学校（現東京都立日比谷高等学校）の校友会を対象として、文部省や学校が校友会の教育的効果を一貫して積極的に利用していたことや、校友会活動がその教育的効果を中学生の成長や教員の成長に及ぼしていたことに着眼して歴史的考察を行う。

また、新制中学校の部活動の発足から今日に至るまでの一貫した先行研究を内海和雄が行っている。本研究では、自分自身が学生時代に経験していた校友会活動が新制中学校での部活動指導に影響を与えていたであろうと仮定して、新制中学校の教員の出身校である師範学校や青年師範学校における校友会について調べた。これらの学校の校友会に特定した先行研究はないが、学校史を援用して校友会とその教育的効果を探ることにした。

中学校の部活動に関しては、創立周年誌、学校史、学習指導要領、中学校体育連盟関係資料、文部省通達について考察を行い、期待された部活動の教育的効果を明らかにする。その際には、学習指導要領改定時に発表された多くの論文や特定の中学校の学校要覧を援用する。

中学校の部活動に関する調査は数多く実施されている。しかし、文部科学省や、各都道府県市、研究者による調査研究は、いずれも継続的な調査ではなく、また全国悉皆調査ではない。運動部に限定した調査も多い。そこで、本研究では、文部省、全日本中学校校長会、日本中学校体育連盟による全国調査、また埼玉県中学校体育連盟、浦和市立中学校教務主任会、埼玉県都市教育長協議会による特定地域における調査から部活動実施に関する知見を得ることにした。これらの調査は部活動の教育的効果に焦点化した調査ではないが、教育的効果に関する質問がいくつかは含まれている。

また、山口満、田中治彦・岩崎渉、東川安雄・水上博司等の研究者が実施した部活動調査も教育的効果に関する質問を含んでいるので、上の調査と併せて校長や教員、生徒、保護者の意識を検討することにした。

しかし、またこれらの調査からはかなり時間が経過しているので、改めて中学校の部活

動の今日的な教育的効果に関する調査を実施しなければならないと考えた。部活動の教育的効果を、学校経営への教育的効果、中学生の基本的な生活習慣の形成への教育的効果、中学生の人的成長への教育的効果、中学生の社会的成長への教育的効果、教員の資質向上への教育的効果、教員の力量形成への教育的効果に分けて、埼玉県内の全公立中学校の校長、運動部顧問、文化部顧問を対象に調査を実施した。本来は全国の中学校の悉皆調査が望ましいが、予算の限界もあって、学校規模や設置されている部活動に偏りが少ない埼玉県を選んで調査を行うことにした。

3. 本論文の構成

本論文は、旧制中学校および新制中学校の部活動における校友会および部活動の展開に関する歴史的考察を行ってその教育的意義について明らかにする、また先行調査研究によって教育的効果に対する意識を明らかにする「第1部 中学校部活動の展開に関する歴史的考察」と、本研究で実施した調査によって中学校部活動の今日的な教育的意義を明らかにする「第2部 中学校部活動の教育的意義に関する調査研究」の2部構成をとり、以下のような構成である。

序章 研究の目的と方法

第1節 研究主題の設定

第2節 本研究の背景

第3節 研究課題の設定と研究方法

第1章 中学校部活動に関する先行研究

第1節 旧制中学校の校友会の教育的効果に関する歴史的考察

第2節 中学校部活動の教育的効果に関する調査研究

第3節 中学校の部活動の教育的効果に関する理論的考察

第4節 中学校の部活動の教育的効果に関する実践的考察

第5節 スポーツ社会学・行政

第1部 中学校部活動の展開に関する歴史的考察

第2章 旧制中学校における校友会の教育的効果に関する歴史的考察

第2節 校友会の二層構造、二重構造の発生

第3節 大正時代の旧制中学校における校友会

第4節 戦前昭和時代の旧制中学校における校友会

第3章 師範学校および青年師範学校における校友会

第1節 第二次世界大戦末期の旧学校制度と新制中学校

第2節 師範学校における校友会

第3節 青年師範学校における校友会

第4章 新制中学校における部活動の創成とその教育的効果

第1節 新制中学校における部活動の創成

第2節 昭和26年学習指導要領一般編（試案）改訂版と部活動

第5章 部活動と特設道徳・必修クラブ活動の設置

- 第1節 部活動と特設道德の設置
- 第2節 部活動と必修クラブ活動の設置
- 第6章 中学校運動部活動の社会体育移行政策
 - 第1節 必修クラブの教育課程編成
 - 第2節 昭和52年中学校学習指導要領
 - 第3節 平成時代の中学校の部活動とスポーツ政策
 - 第4節 部活動の多面構造と冰山構造化
- 第7章 先行調査研究に見る中学校部活動
 - 第1節 中学校部活動に関する先行調査研究
 - 第2節 中学校部活動に対する校長・教員・中学生・保護者の意識に関する考察
- 第2部 中学校部活動の教育的意義に関する調査研究
- 第8章 中学校の部活動と学校経営の充実および中学生の成長
 - 第1節 本調査の概要
 - 第2節 中学校部活動運営と学校教育
 - 第3節 中学生の基本的な生活習慣の形成への教育的効果
 - 第4節 中学生の人的成長への教育的効果
 - 第5節 中学生の社会的成長への教育的効果
- 第9章 中学校部活動指導と教員の成長
 - 第1節 教員の資質・力量とその向上・形成
 - 第2節 中学校教員の資質向上に及ぼす部活動指導の効果
 - 第3節 中学校教員の力量形成に及ぼす部活動指導の効果
 - 第4節 大学における部活動指導科目の設置
- 第10章 文部科学省の教育政策と中学校部活動の社会教育化
 - 第1節 総合型地域スポーツクラブ
 - 第2節 教育振興基本計画における部活動
 - 第3節 「スポーツ振興くじ」計画
 - 第4節 地域社会におけるスポーツ・文化施設
- 終章 本研究の総括と中学校部活動の今後の在り方
 - 第1節 本研究の総括
 - 第2節 中学校部活動の今後の在り方

4. 本論文の各章の概要

序章：本章では、研究主題の設定と研究の方法、および研究課題の設定とその研究方法について述べている。第1節では研究主題を設定した。部活動については、これまでさまざまな活性化対策や社会体育化が実施されてきたが、必ずしも実効をあげられなかった。また、文部科学省が平成19年度から進めている「運動部活動等活性化推進事業」においては、「総合運動部」「ニュースポーツ・レクリエーション運動部」といった新しい部活動に関する実践研究は、部活動の教育的効果について明らかにしないままに進めている。これらの部活動改革は、運動部活動の総合型地域スポーツクラブへの吸収政策と同様に、学

校のスリム化や国民医療費の効率化に焦点化されて、必ずしもその実効をあげてはいない。そこで、部活動の教育的効果を明らかにすることが重要であると考えて、本研究の研究主題を「中学校の部活動の教育的効果に関する研究—歴史的考察と調査研究—」と設定した。第2節では、直近の学習指導要領と中学校現場における部活動の実態から本研究の背景を述べた。第3節では、研究課題の設定と研究方法を定めた。部活動の教育的効果を明らかにするためには、第一に、新制中学校の部活動の原型となった旧制中学校や師範学校、青年師範学校の校友会、および新制中学校の部活動について、歴史的な考察を行うものとした。第二に、今日的な部活動の教育的効果を解明するために、先行調査研究における部活動の教育的効果に加えて、新たに部活動の教育的効果に焦点化した調査を実施して、調査研究を行うことにした。第三に、特定の地域に限定してその社会教育施設を調査して、中学校の部活動を吸収する容量を検証するものとした。

第1章：中学校の部活動に関する先行研究および先行調査研究について整理する。第1節では、初めに桑原三二および渡辺誠三の旧制中学校の校友会に関する先行研究について整理する。第2節では、中学校部活動の教育的効果に関する先行研究統計的考察を行った。これらの先行調査は、主として部活動の実施に関する調査であるが、一部に部活動の教育的効果に関する質問も含まれている。第3節では、中学校の部活動の教育的効果に論及した神谷拓、久保正秋の二重構造論、内海和雄の部活動改革論の理論的考察と教員の資質・力量に関する先行研究を整理し、第4節では、新制中学校の教員の出身校である師範学校および青年師範学校の校友会に関する記録を、第5節では、日下裕弘のスポーツ組織論、多々納秀雄の多変量解析を用いたスポーツ社会学、関春南のスポーツ政策、佐伯年詩雄のスポーツ考現学、内海和雄スポーツ行政に関する知見を整理した。

第2章：旧制中学校における校友会の教育的効果に関する歴史的考察を行った。第1節では、新制中学校の原型となった旧制中学校の校友会活動に関して、明治時代の何時、どのような経緯で誕生し、どのような性格の教育活動として学校教育に組み込まれたかを、渡辺洋三の研究や、東京府立第一中学校（現東京都立日比谷高等学校）の校友会を中心に考察して、学校教育として校友会が担っていた教育的効果や構造を探った。第2節では、その校友会について学校教育としての位置づけやから、校友会の二層構造、二重構造（二重構造は久保正秋による）を明らかにした。第3節では、大正時代の校友会、第4節では、戦前昭和時代の校友会が学校報告団に改変させられた時代について、期待されるその教育的効果の変質を探った。

第3章：師範学校および青年師範学校の校友会の教育的効果を明らかにした。第1節では、新制中学校の教員は、師範学校や青年師範学校出身の教員が多数存在していたことを明らかにし、第2節では、師範学校の校友会活動がどのようなものであったか、第3節では、福井青年師範学校を例にして青年師範学校の校友会がどのようなものであったかを明らかにした。特に師範学校や青年師範学校校友会の設置目的、活動状況を明らかにすることによって、校友会活動に期待された教育的効果を解明した。

第4章：昭和22年新制中学校の発足と、同年の学習指導要領一般編（試案）から昭和26年の学習指導要領一般編（試案）改訂版までの期間を考察の対象として部活動の教育的効果について歴史的考察を行った。第1節では、新制中学校発足時から自由研究としてのクラブ活動のほかに部活動としてのクラブ活動が存在していたを示した。その部活動がど

のような経緯で発足し、また運動部活動を支えてきた中学校体育連盟がどのような目的で設立されたかを探り、新制中学校の部活動はどのような教育的効果を期待されて出発したかを明らかにした。第2節では、昭和26年から昭和33年までの時期に、クラブ活動と部活動の位置関係、部活動に対してGHQは言及しない態度をとったこと、実際の中学校の部活動から部活動の学校現場で期待された教育的効果を考察した。

第5章：道徳教育が導入され、試案としての学習指導要領が法的拘束力を持った昭和33年の中学校学習指導要領から、形式的なクラブ活動と部活動が併存した昭和44年の中学校学習指導要領までの期間を考察の対象とする。第1節では、特設道徳と部活動の期待される教育的効果とクラブ活動の消滅から、部活動の教育的効果をクラブ活動に形式的に代替えさせて、道徳教育に結集させたことを明らかにした。第2節では、再びクラブ活動が必修クラブとして導入され、学校現場が必修クラブと部活動にどのように対応したのか、また、このとき起きた部活動の社会体育化はどのようなものであったのかについて解明した。現実には、部活動が実施され、クラブ活動は看板を掲げたにすぎなかった。

第6章：クラブ活動の必修化を図った昭和55年の中学校学習指導要領から、必修クラブが消滅した平成元年の中学校学習指導要領、必修クラブ活動も部活動も消滅した平成10年の中学校学習指導要領、部活動が明文化された平成20年の中学校学習指導要領までの期間を考察の対象とする。第1節、第2節では、この期間に必修クラブが制度化され、やがて部活動に吸収されて消滅するまでを考察し、その一方で運動部活動の社会体育化に失敗した経緯を明らかにする。部活動の社会教育化の際には、専ら教員の時間外勤務の対策として部活動の教育的効果を吟味することなく実施されたことを明らかにした。第3節では、部活動はクラブ活動の代替としての位置づけから、部活動が教育的効果を有する活動として位置づけられた期間の経緯を考察した。部活動の活性化対策がとられ、他方では運動部活動の社会体育化が図られている。少子化のために減少した中学生、指導する教員の高齢化という問題を解決するために、運動部活動の社会体育化を図るといった原因だけでなく、国民が生涯スポーツに親しむことによって国民の総医療費を軽減する目的が前面に出ていて、部活動の教育的効果の検討は行われていないことを明らかにした。

第4節では、第1章から第6章までの歴史的考察を通して、中学校の部活動を教育課程外の学校教育として扱ってきたこと、そのいっぽうで部活動に教育的効果を認めて学校教育の中においてきたこと、さらに部活動は時代の要請に沿う形で多様な役割を教育的効果として担ってきたことを整理して部活動の多面構造、部活動の氷山構造化としてまとめた。

第7章：これまで中学校の部活動に関する調査研究は、教育行政サイドだけでなく、関係諸機関、研究者によっても数多く実施されている。しかし、これらの調査は継続的な調査ではなく、またそれぞれ単独で実施されたものである。そこで、第1節では、これらの先行調査研究から得られる知見を個別の調査ごとに整理した。第2節では、これらの先行調査研究を横断的に俯瞰して、部活動問題の存在、部活動指導、改善策、部活動改革に対する校長や教員・中学生・保護者の意識の実態を探った。

第8章：先行調査研究は、部活動の運営に対する調査が目的であり、部活動の教育的効果を探る調査研究ではない。また、それらはほとんどが運動部活動を調査の対象として文化部活動を扱っていない。そこで、あらためて本研究では文化部活動を含めた部活動の教育的効果に関する校長や顧問教員の意識調査を行った。第1節では、調査の概要について

記述した。第2節では、特色ある学校づくり、生きる力の育成、学校教育目標の実現、中学生の人間関係能力の育成、学校の活性化、生徒指導の充実、家庭・地域の信頼獲得といった学校経営の各項目について、校長・顧問教員、運動部顧問・文化部顧問、性別、年齢、教職経験年数、担当する部活動詩人の経験の有無別に、教育的効果の評価に違いがあるかどうかを2変量の χ^2 検定を行って検討して、部活動は7つの項目すべてに寄与していて、特に学校の活性化や生徒指導の充実、中学生の人間関係能力の育成に対して高い教育的効果を発揮していると考えられていることを明らかにした。第3節では、中学生の基本的な生活習慣の形成に対して因子分析によって因子を抽出し、下位尺度である校長と顧問教員、教員の属性、部活動の社会教育化の賛否についてt検定を行って差の検討をした。そこから部活動の中学生の基本的な生活習慣の形成の集団生活因子および忘れ物因子に対して、非常に高い教育的効果を発揮していると考えられていることが判明した。また、第4節では、中学生の人間的成長に対して因子分析によって因子を抽出し、下位尺度である校長と顧問教員、教員の属性、部活動の社会教育化の賛否についてt検定を行って差の検討をした。そこから部活動の中学生の人間成長の社会正義感因子、精神力因子、目標達成力因子に対して、非常に高い教育的効果を発揮していると考えられていることが判明した。第5節では、中学生の社会的成長に対して因子分析によって因子を抽出し、下位尺度である校長と顧問教員、教員の属性、部活動の社会教育化の賛否についてt検定を行って差の検討をした。そこから部活動の中学生の社会的成長の社会性因子、国民素養因子、総合能力因子に対して、非常に高い教育的効果を発揮していると考えられていることが判明した。

第9章：部活動は、学校経営や中学生の成長に教育的効果を与えるだけでなく、顧問の教員の資質向上、力量形成に対しても教育的効果が発揮されることも考えられる。特に大多数の教員が顧問を務めている中学校においては、教員の成長と部活動指導は密接な関係にあることが予想される。第1節では、教員の資質向上・力量形成を先行研究や教育職員養成審議会答申によって整理した。第2節では、本研究の調査結果に対して因子分析によって因子を抽出し、下位尺度である校長と顧問教員、教員の属性、部活動の社会教育化の賛否についてt検定を行って差の検討をした。そこから部活動の教員の資質向上に対する教育的効果を探り、教員の知性や感性の向上に寄与していることを明らかにした。第3節では、同じように因子分析によって因子を抽出し、下位尺度である校長と顧問教員、教員の属性、部活動の社会教育化の賛否についてt検定を行って差の検討をした。そこから部活動の教員の力量形成に対する教育的効果を探り、教員の判断力や理解力、指導力の形成に寄与していることを明らかにした。

第10章：部活動、特に運動部活動は学習指導要領によって位置づけされてきたが、国のスポーツ政策によっても大きく左右されている。そこで、第1節、第2節では、文部科学省および埼玉県とさいたま市の「スポーツ振興基本計画」「教育振興基本計画」を取り上げて、中学校の部活動の社会教育化をどのように位置づけているかを検証する。また、第3節では、総合型地域スポーツクラブを推進するための財源である「スポーツ振興くじ」の財務状況を検証して、運動部活動の社会体育化の可能性を探り、運動部活動の社会体育化の実現が遠いことを明らかにした。最後に、第4節では、一つの市、さいたま市を例として、地域社会のスポーツ・文化施設が中学校の部活動の社会教育化が可能な容量を有しているかについて検証して、部活動の社会教育化が現状では実現の程遠い状態であること

を示した。

終章：本研究の総括を行い、今後の部活動の在り方に関してこれまでの知見に基づいて考察を行った。